岳精流日本吟院

ちよだ

第１１号

平成１３年５月

千代田岳精会弘報

岳精流全国吟道大会
合吟コンクール健吟を期待

六月廿四日、川崎市教育文化会館で開催の、岳精流全国吟道大会に左記の方々が代表として出場されます。吟題は広瀬淡窓作**「西教寺を訪う」**日頃の実力が、晴れの舞台で発揮出来るよう、厳しい会長指導が続けられており、好成績が期待されます。

（略敬称）

（丸ノ内第一）林　筑山
（丸ノ内第二）堀　哲泉、八田　豊
（東陽町）武田　弘泉
（神　田）町田　湧泉
（清　水）宮武　保義
（ハザマ）遊佐　梅泉、仙田　暘一
（錬　水）菅原　克山、加藤　錬山

宗家の指導金言

会長　飯田　龍鷹

今年も又、新緑薫る四月十四日、横山宗家、渡　精華先生のご指導による昇伝審査を市ヶ谷で終了しました。両先生に限りない感謝を申し上げ、又各位の挑戦に賭ける奮斗努力と、サポーター会員の業務支援に、心から敬意を表します。

さて当日、宗家のご指導の中から、会員特に比較的吟歴の新しい会員に参考となる**「金言」**を茲に掲げて、勉強に供したいと思います。

一、先ずは、発声発音の金言集から致します。

○訓（よ）みをしっかりと明瞭に。
○言語（言葉）が不明確にならぬようハッキリと。
○母音（ア）が濁っている、**ア・ウ・オ**が判然としない。
○声は口にこもらず前に出す。
○沢山呼吸して停電（息切れ）にならぬよう。

「愚考」詩吟は、もと、**広瀬淡窓**あたりの塾で、漢文や漢詩にリズムと音感をつけて読む風習から始まり、次第に余韻を長く引くようになったものです。漢詩を味わい学ぶことが主体で来ていますから、正しい読み方と、明瞭な発音が必要です。この為には、口を活発に開閉する練習が不可欠であり、それには発声練習として、**ア・イ・ウ・エ・オ・ン**の六っの母音を如何に綺麗に出すかという練習であり、鏡を見て、自分の口の開閉をよく研究することが肝要と思います。

二、次の金言は節調指導からです。

○詩吟は余韻の芸術である。
○墨が薄くならぬよう留意する。全体が薄くなるということもあるが、特に中音下音の処に注意。
○ゆり流しの余韻は尻切れにならぬよう綺麗にひく。
○わたりを極端にせぬこと。
○一本高い本数に挑戦して見よう。

「愚考」戦後、芸術としての詩吟が芽吹き、単なる悲憤慷慨ものから豊かな節調へ、大声を張り上げる丈の吟法が姿を消し、余韻が長くなり、節調がきめ細かく洗練されて来た。アクセントも研究され、芸術性を高めて来ました。英語のアクセントは強弱ですが、日本語のアクセントは高低で表わされます。アクセントを巧みに利用するのが詩吟の節調です、又、詩吟に伴奏を用いることが常識化され、ために吟調が非常に音楽的になりました。

三、金言の最後は、吟詠における詩心の表現と態度、心構えです。

○吟ずる姿勢は自然体。
○継続は力なり。
○声の良さ丈に満足しない、輝きが必要。
○間延びせず、迫力を。
○低音部を濃く、転句を楽に。
○詩情を豊かに。

「愚考」継続は力なり。人生の基本の言葉ですが「金剛石も磨かずば玉の光は添わざらん」です。

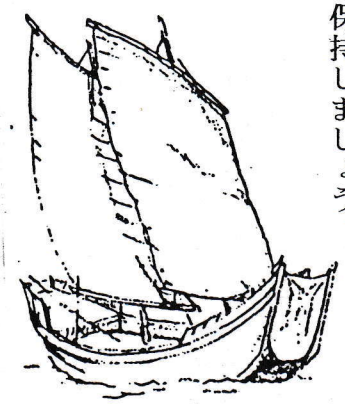
どんな良い素質を持っていても輝きは出てきません。継続する努力です。姿勢は、凛々しくはあっても壮士風ではない穏やかさ、楽々です。

岳精流の理念や信条をよく外部の人から尋ねられる事があります。

復唱しますと、

『詩を吟ずることにより、
真なるものに触れ、
善なる心をよび起し、
美なるものに感動する』

訓んで吟じて、節調をつけて、詩情の表現を豊かにし、高い感性を保持しましょう。



平成十三年度昇伝審査

宗家に審査頂けたしあわせ

新世紀初の昇伝審査は、宗家が自ら審査して下さるとの報に全教場からどよめきが起った。ご高齢の宗家に全国大会以外では滅多にお目にかかれない我々にとって又と無いチャンスでした。

晴れ渡った当日、飯田会長はじめ千代田岳精会の幹部、受審の会員百十名が宮崎県東京会館に宗家、渡　精華先生をお迎えして二会場で審査が実施されました。

若々しい宗家のご指導、懇切な渡先生の技術指導を受けられたことは、貴重な体験でありました。

懇親会で、飯田会長のお礼の言葉を受けて、宗家は「審査に参ることは少ないが、九三歳の粕川さんが初受審された事に勇気づけられ一番感動しました。人間関係が希薄になった世の中を良くする為に吟の縁を大切にしましょう、愛好者をどんどん増やして下さい、今日は有難う」とご挨拶され、渡先生は「宗家が審査に来られたことと私の会では一度も有りません。それだけ千代田が期待されているのだと思います。今日の整然とした進行に感心し、傍目にも羨ましく思います」と挨拶され乾杯の音頭をとられました。

緊張の時が終わり、久し振りの千代田全員集合と、心地よい疲れに食欲、メートル大いに上がったところで時間となり、磯田副会長の一本締めでお開き、充実した密度の濃い一日は終わりました。

事前に何度も会場を訪ね、打合わせて万全の準備をして下さった研修部門、事業部門、親和部門、当日の接待役婦人部門、そして受付け担当の高段者の皆さん、有難う、ご苦労さまでした。

『受審者の感想文』

吟ずることが生甲斐

東陽町教場　前田　道泉

宗家先生・渡副幹事長先生による審査が行なわれるという報告に、教場内一瞬緊張感が漲り、以後一層気合いの入った勉強が重ねられた。九段の桜の賑わいも終わって、当日は春風の薫わしい日和だった。市ヶ谷の審査会場には、定刻通り次々と受験生が参集、東陽町教場全員滞りなく審査を受けた。

真善美　吟魂わたる　九段坂

研鑽の詠　久遠に通ず

日頃の訓練の成果を、この日の吟詠に賭けて、それぞれが力一杯の「わが吟」の披露が出来たのだと思った。廊下に控えている者にまで、その迫力が伝わって来るのを感じた。先生には熱っぽく、個々の吟詠についてのご指導を賜ることが出来た。更なる向上のために！時間を超えて有難い助言を沢山戴けた。明日への糧として全身で受けとめ、きっと向上へと結びつけたい。

生きてこそ

昨年今年（こぞことし）**あり**

老い桜

吟ずることが健康であり、吟ずることで生甲斐がある。

手をとって、さあ往こうではないか！　共に。

新しい人生を見すえて

丸の内第二教場　唐沢　道夫

私は大正十一年十月生れ、間もなく八十歳を迎えます。明治生命を定年退職後、七十歳まで名古屋の会社で仕事一筋に頑張って参りましたが、いざ開放されますと、残された生涯の目標を失った毎日でした。

飯田会長はじめ、伴、岩崎両幹部より「詩吟」はこれからの人生を生き抜くため、最良の健康法だと勧められ、約一年半前に入会させて頂きました。

最初馴れるまで苦労致しましたが、皆様のご指導により最近では月四回の研修が待遠しい程です。

今回は初段の受審をさせて頂き、先輩諸氏との交遊も深まり、将来への生々した目標が、新しく生まれそうな今日此の頃です。

今までは、趣味として下手なゴルフしか楽しめなかった私に、新らたな目標が加わった事に感謝し、今後とも宜しくお願い致します。

初めての受審を極度の緊張で

清水教場　渡辺　正吾

二、三日前から気持が高ぶって審査当日は緊張が極限に達していた。控室で瞑想しながら吟句を暗唱していた時も思うように息が続かなかった。三時から会場で前教場の審査に同席していたが、更に落着きがない。前夜妻からは、声を上げ過ぎてうわずってしまうので、もっと自然体でゆったりと吟じてみたらと云われ、音大出の娘からは、背筋をピンと伸ばし、真直ぐ前を向いて目線をやゝ遠めに置き、肩の力を抜いてリラックスすれば声は素直に出てくるからネと助言されていた。

清水教場の二番目に私の出番となり、審査の先生の前に直立不動の姿勢で足決めをした時、今日は失敗するだろうという予感が背筋を走った。やっとの思いで吟じ終えたが、結果は最悪であり練習の成果など望むべくも無かった。

宗家先生から「初めての昇伝審査で緊張するなと云っても無理か

も知れないが、身体の震えが声の震えになり、聞く方が息苦しくなる。転句が息切れしては吟にならない。一番大事な余韻を大切にして、しっかり吟じてもらいたい」との厳しいご指導を戴いた。更に全員が終わって最後の感想で「吟は個人差があって当然であり、間の取り方、山の強弱、止めの韻は個性が出た方が味わいがある」とも云われた。

私はこのご指導に力を得て、私自身の吟を続ける誓いを心に帰路についた。

昇伝審査に寄せて

丸の内第一教場　右ノ子　菱泉

早いもので桜も散り、今は八重桜が咲き誇っています。四月十四日は私達の一年に一回の昇伝審査です。丸の内第一は一番最後で、落ち着かない気持で待ちました。

審査して下さる先生に、宗家先生と渡　精華先生をお迎えし、教室は二カ所に別れ、私達は渡先生でした。大分馴れているようでも、いざ先生の前で吟じますと普段と違い思うように声が出ません、他の方は上手に吟じられていました。

終了後の懇親会で宗家先生のご挨拶のなかで「一番ご高齢の九三歳の方が頑張っておられます」と話されました。私もいつまでも健康で続けたいと思います。

審査会も無事終了する事が出来、準備をして下さった方々に感謝いたします、有難うございました。

昇伝審査を終えて

ハザマ教場　前田　達也

千代田岳精会に入会させて頂いてから約四か月、四月十四日は初めての昇伝審査の日です。

初めてお目にかかる宗家先生の審査であり、当教場のトップバッター、かなり緊張して吟に入りました。……終わって一礼、宗家先生の講評、ご指導、と三分余りで私の審査は終わりました。

ご講評は好意に溢れていて、又今後の方向をご指導戴き、安堵と充足感で席に戻りました。これ偏に飯田会長、鈴木教場長、教場の諸先輩の懇切なご指導を得た結果と感謝する次第です。

夕方からの懇親会での皆様方との交流は更に楽しいものでした。

心地よい夜風に送られて、吟友先輩方と帯坂を下り、帰途につきました。

初審査を受けて

丸の内女子教場　山手　純子

主人が時折、先生方の朗々とした吟詠に合わせて、発声を練習しているのを耳にし、又その詩文に興味を持ち、早朝のテレビ放送で漢詩紀行を見たりと、その様な日々を過ごして参りました時、女子教場の開設と云う機会に恵まれ、早速入会させて頂き、菅原琴山先生のご指導を仰ぐ事になりました。

懇切なご指導のお陰で、どうにかヨチヨチ歩きが出来るようになったところで、今回の審査を受ける事となり、宗家先生直々の審査に緊張しましたが、諸先生方の激励をバックに無我夢中で「雪中梅を見る」を吟じました。

宗家先生の初心者に対する温かいお心づかいと過分なご講評を拝聴し、無事吟じ終え、この日の感動を忘れること無く、これからも吟の奥深い境地に少しでも入り込めばと思えた貴重な一日でありました。

第三四回全国吟剣詩舞道大会
岳精流男子部出場

十一月十一日、日本武道館で開催される第三四回大会に岳精流男子部が出場する事になり、千代田岳精会からも代表が参加します。

これまで男子部が優勝二回、女子部が砂子岳精会と併せて優勝三回の他、男女共上位入賞多数の実績があり、男子部として平成七年に続く優勝を目指します。

平成十三年度昇伝者

中伝

丸の内第一　林　筑山
丸の内第二　勝田　賢山
東陽町　八尾　葉山
錬　水　加藤　錬山

初伝

丸の内第一　右ノ子　菱泉
岩崎　桂泉
丸の内第二　高橋　耀泉
本多　弘泉
野沢　柳泉
東陽町　高橋　辰泉
細田　舞泉
太田　緑泉
神田　上田　也泉
池田　皓泉
酒井　帆泉
藤森　静泉
村井　蓉泉
清水　星野　久泉
山手　英泉
湯山　申泉
小林　柔泉
ハザマ　西川　宗泉
功刀　蒼泉
駒澤　涛泉
坂本　天泉
高橋　暁泉
津田　青泉
中川　睦泉
長谷川　藍泉
羽生田　蛍泉
宮澤　修泉
遊佐　梅泉
加藤　虎泉
樋沢　桃泉
錬　水

自分なりの詩心の表現を

清水教場　宮武　保義

全国吟詠コンクール大会に初めて参加した。会場の鶴見公会堂は百十名を超す出場者と大会関係者の熱気に包まれていた。最初の幼年の部の三人は、私の地元にある逗子教場の子供達で、私と同じ吟題「**山行**」を堂々と吟じ、大いに勇気づけられた。続いて少年、青年、寿栄の部とプログラムは進む。

昼食休憩のあと宗家のご挨拶があり「大会では失敗は許されない。選手の皆さんは、厳しい真善美の一日に感謝しなければいけない」との励ましのお言葉をいただいた。

一般の部に入り、優勝吟を始めとする高度な技と力に満ちた吟詠に耳を傾けているうちに私の出番となる。舞台の中央に進み、マイクの高さを整えていると不思議に心が落着いた。伴奏の音に気持ちを集中させながら、吟じ始め、吟じ終えることができた。

審査の結果を待つ間にお会いした先生方から、良く声が響いていたよとお誉めの言葉を頂いたのが嬉しかった。まだ修行の月日の短い私の吟が入賞に至らないのは当然だが、舞台に立つ迄の四カ月の練習は、吟題の詩心を如何に表現するかの格闘であり、最後に漸く自分なりの表現法を会得出来たことは、素晴らしい経験でした。

岳精流全国吟詠コンクール大会に出場して

ハザマ教場　功刀　正之

昨年の温習会当日、飯田会長、鈴木教場長より、全国コンクール出場を勧められ、突然の事に緊張が全身を走りました。非常な不安を感じる一方、大きな経験と前進する為の機会を与えて下さったことに感謝し「**西教寺を訪う**」で挑戦することと致しました。

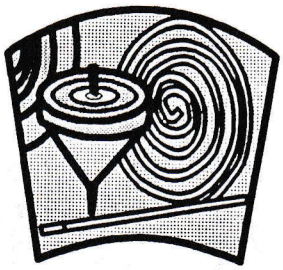
苦手とする「**オ**」の発声をはじめ会長・教場長よりの厳しい特訓を受け、後悔の無いようにと頑張って居りましたところ、大会の十日前になって突然声が出なくなってしまったのです。会長紹介の咽喉科の名医で声帯の両側が赤く大きく腫れているとの診断。若し大会当日声が出ないと言うことになれば指導頂いた両先生、支援して下さっている吟友の方々に申訳ないが、今更交替も出来ず、発声練習も出来ない不安な状態で当日を迎えていました。

本番では何とか少し声は出たものいつもの精力的な勢いは無く気力のない吟に終わってしまった感があり残念に思っている次第です。出場に先立ち城戸副教場長より「コンクールに出場すると云うことは入選する、しないは別として参加するプロセスと云うものが大事なんですよ」と云われた。後で考えてみると、所謂自己管理の大切さもその一つであると感じた。

声が出なくなったことは徹底した自己管理が足りなかったことが原因であったと痛感し、深く反省させられました。

さて、考えてみますとコンクールには色々な制約、規則があります。大会の運営上、選考上当然の事と思いますが、岳精流を最も愛する者の一人として、常日頃詩を吟ずる時は、時間に制約されることなく、作詩者の心情、描かれている情景等を脳裡に想い浮かべながら「**わたり**」を充分に使っての、悠々とした情感溢れる吟詠をモットーに人生を明るく楽しく過ごしてゆきたいと念願しています。

どうか会長、教場長、吟友の方々、今後共よろしくお願い申し上げます。



吟楽碑（岳精流合祀の碑）西多摩霊園で建碑式・合祀祭

宗家の吟道六五周年を記念して建設が進められていた吟楽碑が、第六番目の吟魂碑の建てられている西多摩霊園に完成し、五月十一日に宗家をはじめ多数の岳精流の方々、当会からも飯田会長、幹部方が参列され、建碑式・合祀祭が厳かに挙行されました。

この碑には、岳精会の物故者で、ご遺族より希望があった方の名前を刻み遺されますが、今回当会では次の三方が合祀されました。

故　今橋　麗泉　様
故　板橋　禮介　様
故　松本　寿　様

吟剣詩舞道全国吟詠コンクール地区予選出場、入賞共に最高！

節調の異なる他流派と同じ詩で競う吟詠コンクールは、飯田会長の特別レッスンも受講出来、出場者にとりステップアップの大きな節目となっております。

四月二十九日に川崎市で開催の地区予選は一般二部九名、三部十名と過去最高の出場者でした。

結果は、二部三名、三部三名の六名の方が入賞とこれ又最高を記録。五月廿日の神奈川県大会へは四名の方が出場されます。

二部　◎耳塚　昇山（東陽町）
　　◎城戸　稲泉（ハザマ）
三部　菅原　琴山（女　子）
　　◎渋谷　辰泉（東陽町）
　　◎中川　睦泉（ハザマ）
　　大竹　和泉（神　田）

◎印は神奈川県大会出場

東陽町教場開設一〇年で新体制

新しい酒は新しい皮袋に

九一年千代田教場より株分けされ、磯田副会長により東陽町に植えられた苗木は、歳月を経て青々と枝葉を繁らせた壮樹となり、千代田岳精会の繁栄を担って来ましたが、十年を契機に多大な功績を残された副会長が教場長を勇退され、副会長に専念されます。

新しく、耳塚昇山氏が教場長に武田弘泉氏が副教場長に就任されました。

五月九日、中野ゼロホールで来賓として横山精真宗嗣、渡　精華本部副幹事長他多数の先生をお迎えし、一〇周年記念温習会が開催されました。（詳細次号掲載）

副会長の長年にわたる懇切なご指導に感謝し、今後も宜しくお願い致します。耳塚・武田新体制の今後を期待しましょう。

☆耳塚教場長のご挨拶

『東陽町はみんなが主役』

平成四年二月に現磯田真風副会長が、当時岳精会千代田教場の分教場として明治生命東陽町ビルに開設、早いもので今年はそれから十年目に入りました。それを区切りに、磯田先生は千代田岳精会の副会長に専任するので誰かが教場長を引継ぐようにとの要請があり、たまたま教場開設第一期生の一人である私に大役が回って来たのであります。十年の年月は経ているものの、未熟者の私には副会長が心血を注ぎ作り上げてきた今日の素晴らしい教場の長を受け継ぐのは大変もったいなく、又責任の重さを痛感しています。幸い詩吟のご指導は引続き副会長とボランティアで岩崎先生にして頂ける事になっていますし、教場の運営についても、副会長の発案である全員がどこかに所属する八っの委員会のリーダー（座長武田副教場長）の積極的な取組みで円滑に行なわれています。その意味では大変恵まれた教場長であります。

我儘な私どもを辛抱強く導き、揺るぎない今日の教場を築いてこられた副会長のご苦労を思い、教場の皆さんと一緒に更なる発展に微力を尽くす覚悟です。千代田岳精会の諸先生並びに吟友の皆さんの一層のご指導ご鞭撻をお願い致します。

『教場だより』

観櫻吟行会に参加して

九段下で集合し、武道館近くの桜の下で合吟の予定でしたが、生憎某大学の入学式と重なり、あまりの行列にやむなく合吟は取り止め、楽しみにしていたのに残念ながら聴けませんでした。

今年は桜の開花が早く、胸中、当日まで散らずに待ってくれるのか心配して居りましたが、その日はお天気も良く、桜もまだまだ美しく枝に残っていてくれました。

合吟の場所を宮崎県東京会館に移して、宴のもと、それぞれの方の吟を聴くことが出来ました。

終って、市ヶ谷から飯田橋まで旧江戸城の外堀の桜土手を、元店長さんや、それぞれの道を極めた方々と親しく歩けたことは、私の人生にひとひらの思い出を作ることが出来ました。

初心者の私を心暖かく迎えて下さる方々に感謝し、吟の節と礼を身を持って感じて居ります。明治生命に入社して十四年、もうそろそろ自分の時間も、人生も大切に生きたいと思うこの頃、皆様にお会い出来て本当に良かったと思います。岩崎ファミリーのもと、暖かさに包まれて、私自身吟と共に磨いて行きたいと思っております。

（丸ノ内第二教場　坂下康子）

花見吟行会

恒例の丸の内第二、東陽町教場合同「花見吟行会」は例年に無く開花の早かった花が、その後の天候不順のお陰か絶好の花見日和、我々を待つていてくれたように正に春爛漫と咲き誇る桜・桜・桜。

しかし「北の丸公園」はN大の入学式の大混雑で、桜の下での大合吟も「千鳥が淵」散策も諦め懇親会場の宮崎県東京会館へ。幹事諸氏の手配の宴席は婦人軍団心尽しの料理の数々が華を添え、清水、ハザマの吟友も加え総勢四十名で会場は溢れんばかり、熱気むんむんの開会となりました。

磯田副会長の簡潔な開会挨拶に続き、岩崎教場長の唱導で大合吟「**桜花を讃う**」角光嘯堂作で全員更にヒートアップ、太田翠山さんの軽妙な司会で全員の独吟・合吟が進行、懇親が深まりました。

十二時過ぎに始まった会も三時近く一本締めで目出度く終了。楽しくも又充実した一日でした。

散会後は半数以上の人が、満開の土手の上を散策しながら飯田橋方面へ向かい：その殆どの人が二次会？で再合流したのは言うまでもありません。

吟友よ　有難う！

幹事諸氏よ有難う！

そして婦人軍団よ　有難う！

（東陽町教場　荻　裕山）

『私の心に残る一詩』その四

丸の内第二教場長　岩崎　泰風

峨眉山月の歌　　李　白

峨眉山月半輪秋　影入平羌江水流
夜発清渓向三峡　思君不見下渝州

今から十数年前、永年の社友（戦友？）の飯田会長に誘われ吟詠を始めて間もなく一本のテープを渡された。岳精流を代表する幹部の先生方の素晴らしい声の吟詠集であった。

丁度その頃、「**峨眉山月の歌**」のレッスンを受けたばかりで、李白の清澄でロマンチックな詩情に感心し、李白の思いを独特な美しい節調で表現、加えて転句の最高音の吟声にすっかり魅惑されていた。同時に最高音の発声が難しく苦労していた時でもあった。

テープに録音されていた「**峨眉山月の歌**」の見事な節調と美声に魅了され、繰り返し聞き最高音に挑戦した記憶が蘇る。

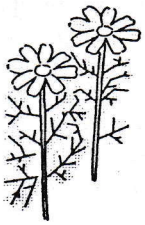
当時の温習会や発表の機会ある度に此の詩を選びながらも、最高音に苦心したものである。

あの頃から十年以上経った今でも納得のゆく最高音の吟声に今いちの感を抱いたままのような気がしてならない。

コンダクター研修会大盛況

教場の伴奏として、又独習に習得したいとの要望の多かったコンダクター研修会が磯田副会長の指導で三月廿九日開催され、申込者を大幅に上回る卅数名が参加し基本から教わったが、更に学びたいとの声が多く、次の三回を追加実施する事になった。またこの機会に購入を希望される方も多い。

第二回　五月廿九日（火）
　　十七時～十九時
第三回　七月卅一日（火）〃
第四回　九月廿五日（火）〃



『新会員紹介』

◇清水教場

渡邊　正吾氏（十二月入会）

昭和十年生れの清水建設ＯＢ、子会社を経て現在は自適の生活。腹から声を出す機会が少なくなったのが入会の動機、練習日は欠かさず出席する真面目な性格の上、声量豊かな期待の新人。

古川　章三氏（二月入会）

茨城大洗の産で旧制水戸高校の出身。旧三菱鉱業勤務、リタイア後は武蔵野市で絵画に親しみ水高美術同好会に所属。二年先輩の寺沼達夫氏が詩吟に意欲がある事を知り紹介されました。

◇ハザマ教場

前田　達也氏（十二月入会）

とにかく、全ての事に積極的に取り組まれる大型新人です。

現役時代、札幌在勤中「詩吟学院」で四年間の研修経験があり、目下傾倒中のコンピューターのフライトシュミレーターと共に大きく吟道飛躍が期待されます。

村松　長治氏（二月入会）

佐藤甲泉さんの旧知のご縁で入会「初めは処女のごとく：」の言葉で表現出来そうな将来性を感じさせてくれる方です。

園芸が趣味という、物静かさの中にじっくりと吟に取り組む真摯さが感じられます。

萩原　晴久氏（二月入会）

当教場最若手として、先輩会員からの期待大です。現役時代打ち込んだ野球では投手として名を馳せ、一方ゴルフはシングルの腕前とか。「徹すること」をモットーに、吟道の第一歩を踏み出しています。

高橋　健一氏（三月入会）

かって、都立国立高校甲子園初出場時、先輩としてコーチをされた由、ご本人も学生時代から三番、サードを貫き通した名選手。囲碁三段、旅行と幅広い趣味に新たに「健康のため」の吟が加わり、これからが楽しみです。

◇丸の内第二教場

坂下　康子さん（三月入会）

明治生命千代田第一営業室所属。入会と昇伝審査が重なり、まだ個別指導の時間が無い中で「山行」を独習で覚え、先輩を驚かせました。度胸も十分、期待の新人。

丸山　貞子さん（五月入会）

島田喜代子さんと趣味の社交ダンスの仲間です。毎週熱心に見学に参加され、声が出せる段階まで学び入会されました。

◇錬水教場

仁木　正男氏（四月入会）

昭和五年八月生まれ七十歳、柏市在住、㈱エヌ・ケイ情報エンジニアリング勤務の現役。きっかけは錬水の第二教場、大塚駅前の蕎麦屋「長寿庵」の常連。

●松本　寿氏（神田）

平成十三年二月三日ご逝去されました。享年七十四歳、謹んでご冥福をお祈りいたします。

編集後記

新世紀の冬は、思いがけず厳しい寒さで、お陰で桜が一気に開花して爛漫の春を堪能できました。

心地よい風のなかに、昇伝・段審査に、コンクール参加に備えた朗々とした吟声が各教場で響いていました。（八田）